

2 展示

[概要]

歴博は、研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については、総合展示および企画展示、特集展示、くらしの植物苑における特別企画、人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

総合展示はこれまで研究の進展に応じたりニューアルを実施してきている。第5・6室（近代・現代）のリニューアルが進行中であるほか、2022年度から第2室（中世）のリニューアル委員会が発足した。

2023年度は企画展示2本、特集展示4本を実施した。企画展示「陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—」（2023年10月3日～12月10日）は、陰陽道と暦について、その歴史とそこから生み出された文化について展示した。展示の学術的背景としては共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（研究代表者：梅田千尋〔京都女子大学教授〕）2018～2020年度）をはじめとする当館の調査・研究活動の成果があった。

企画展示「歴博色尽くし」（2024年3月12日～5月6日）は、文化庁選定保存技術「建造物彩色」保持者であった山崎昭二郎氏（1927～1993）、川面稜一氏（1914～2005）の手による本館所蔵の模型等を展示した。

特集展示は、第1展示室の特集展示として「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」（2023年11月14日～2024年2月12日）、第3展示室の特集展示「『もの』からみる近世」として「江戸の妖怪絵巻」（2023年8月1日～9月3日）、「新出の野村コレクション」（2024年1月5日～2月4日）、第4展示室の特集展示として「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」（2023年9月26日～2024年2月25日）を開催した。このうち、「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」については、本館と東京大学大学院人文社会系研究科・同附属北海文化研究常呂実習施設の共同主催である。

くらしの植物苑の特別企画としては、「伝統の桜草」（2023年4月11日～4月30日）、「伝統の朝顔」（2023年8月9日～9月10日）、「伝統の古典菊」（2023年10月31日～11月26日）、「冬の華・サザンカ」（2023年11月28日～2024年1月28日）を開催した。

展示担当 箱崎 真隆

企画展示等の実施

企画展示

「陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—」 2023年10月3日～12月10日
「歴博色尽くし」 2024年3月12日～5月6日

くらしの植物苑特別企画

「伝統の桜草」 2023年4月11日～4月30日
「伝統の朝顔」 2023年8月9日～9月10日
「伝統の古典菊」 2023年10月31日～11月26日
「冬の華・サザンカ」 2023年11月28日～2024年1月28日

特集展示

第1展示室 特集展示

「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」 2023年11月14日～2024年2月12日

第3展示室 特集展示「もの」からみる近世

「江戸の妖怪絵巻」 2023年8月1日～9月3日
「新出の野村コレクション」 2024年1月5日～2月4日

第4展示室 特集展示

「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」

2023年9月26日～2024年2月25日

[総合展示リニューアル]

〈総合展示新構築〉

1. 第5室・第6室リニューアル委員会

(1) 概要

昨年度から引き続き、2023年9月までの詳細設計の完成を目指し、展示設計業者とブロック・コーナーごとに打ち合わせを重ね、造作物、展示資料、パネル等の内容を詰めていった。9月30日には全体会議を開催し、展示構成について、リニューアル委員会全体で最終確認を行った。10月以降は提出された展示解説原稿についての読み合わせを行い、解説内容の修正や文字数の調整などを行った。その他は、リニューアルに関する資料購入や複製製作、資料調査を実施した。

(2) リニューアル委員会（全体会議）

2023年9月30日 第1回全体会議

2024年3月24日 第2回全体会議

(3) リニューアル委員会（館内会議）

2023年4月14日、5月12日、6月9日、7月14日、9月8日、10月13日、11月10日、11月21日、12月8日、

2024年1月12日、2月9日、3月15日

(4) 展示設計業者との打合せ

2023年4月4日、4月7日、4月10日、4月11日、4月13日、5月8日、5月9日、5月11日、5月16日、5月19日、6月23日、7月7日

2. 第2室リニューアル委員会

(1) 概要

1983年の開館以来、研究の進展にあわせて総合展示室のリニューアルを徐々に実施し、第3・4・1室は終了、第5・6室は現在進行中である。第2室は開館当初に設置されたにもかかわらず、1997～99年度に暫定改善を実施した程度で、本格的なリニューアル改善はおこなっていない。しかしこの40年の中世史研究の進展には著しいものがあり、いつまでも現状の展示のままに置くわけにはいかないと判断し、2022年度からリニューアル委員会を発足することとなった。開室目標は2031年度（2032年3月）とする。当面の課題は広範な中世史研究の状況把握と、現状展示改善点の検討により、新たなテーマを立てることと考え、リニューアル委員会では研究会形式の会議を積み重ねることとした。

(2) リニューアル委員会（研究会）

2023年7月8日～7月10日 第1回研究会（福井県）

2023年8月23日～8月24日 第2回研究会

2024年3月1日～3月2日 第3回研究会

(3) リニューアル委員会（共同研究研究会）「中世日本の地域社会における都市の存立と機能の研究」

2023年11月7日～11月9日 調査・研究会（群馬県）

[企画展示]

企画展示「陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—」

会期：令和5年10月3日（火）～令和5年12月10日（日）（開催日数：60日間）

1. 展示趣旨

現代日本社会において用いられている太陽暦の淵源は明治6年の改暦である。2023年は、その明治改暦から、ちょうど150年の節目の年であった。社会の基盤を成している暦日感覚は、明治の改暦での太陽暦の採用が大きな画期となった。それ以前の日本の暦、すなわち太陰太陽暦の長い歴史とそれにかかわった陰陽師たちの事績について広く検討し、陰陽道と暦の日本列島上における展開を示すのがこの展示の主たる目的である。なお、この展示の内容は、共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（代表・梅田千尋〔京都女子大学〕、

2018～2020年度)による資料調査および研究の成果を中心とするものである。

ここでは陰陽道研究の進展に依拠しながら、陰陽道の基礎的な資料を集成し、日本列島社会における暦とその作成・管理をはじめとする暦日・天文等に関する陰陽道の姿を具体的に提示する。その際には陰陽師という存在とその職掌に着目し、前近代の暦に深く関わった陰陽道の形成から展開、衰退に関する史資料をなるべく広範に展示することで、通俗的なイメージが先行しがちな陰陽師の実体とその歴史的民俗的な役割を提示し、新たな研究の礎石としたい。とりわけ留意したいのが、確実な資料に基づいて、陰陽道・陰陽師について考える機会を提供することである。さらに暦関係資料を多角的な視点からとらえ、暦をめぐる文化を広くとり上げ、考察するとともに、その背景にある、時間をめぐる意識や観念の形成、天変や観天望気をめぐる習俗までをもとらえていきたい。

なお、この展示は科学研究費基盤研究(C)「古代～近代陰陽道史料群の歴史的変遷と相互関係の解明」(研究代表・梅田千尋・京都女子大学)の成果の一部でもある。

2. 展示構成と主な展示資料

・展示構成

プロローグ 陰陽師をさぐる

第1部 陰陽師のあしあと

- 1.1 陰陽師、あらわる—古代の陰陽道
- 1.2 陰陽師、ひろがる—中世の陰陽道
- 1.3 陰陽師、たばねる—近世の陰陽道
- 1.4 陰陽師の仕事
- 1.5 陰陽道と民俗

第2部 安倍晴明のものがたり

- 2.1 安倍晴明とその子孫
- 2.2 安倍晴明のライバルたち
- 2.3 転生する安倍晴明

第3部 暦とその文化

- 3.1 暦をくばる
- 3.2 暦をかえる
- 3.3 暦をそろえる

エピローグ 陰陽師が残したもの

・主な展示資料

第1部

奈良暦師吉川家旧蔵資料(H679)、若杉家文書(京都府立京都学・歴彩館)、土御門家文書(宮内庁書陵部、東京大学史料編纂所)、谷川家文書(暦会館)、『奈與竹物語』(曇華院)、金澤貞顕書状(称名寺)、名田庄室町幕府制札(加茂神社)、宇佐宮御祓会絵図(宇佐神宮)、土御門家屋敷図(個人)、大將軍神像(大將軍八神社)、呪符かわらけ(墨田区教育委員会)、大土公神祭文(豊根村教育委員会)、『神像絵巻』(妙法院)ほか。

第2部

『泣不動縁起絵巻』(清浄華院、奈良国立博物館)、陰陽師と式神・外道 復元模型(F383)、『玉藻前草子絵巻』(サントリー美術館)、『たま藻のまへ』(京都大学附属図書館)、安倍晴明公御神像(晴明神社)、『東北院職人歌合』(H-600-1149)、『安倍晴明物語』(個人蔵)、『しのだづまつりぎつね付あべノ出生』(大阪大学附属図書館)、イソテヌグイ(F-76)ほか。

第3部

『天経或問』(国立天文台)、渾天儀(H-110-4-7)、『天文図・世界図屏風』(個人蔵)、改暦詔書(国立公文書館)、『明治二十二年両暦使用取調書』(国立天文台)、引き札類(トーガン資料室)、お化け暦(個人蔵)、令和元年カレンダー(個人蔵)ほか。

3. 刊行物

展示図録(B5判 328頁)

展示解説シート(B5判 4頁)

広報用ポスター、チラシ

4. 関連行事

(1) 報道向け内覧会 令和5年10月2日(月)

(2) 第117回歴博フォーラム

- ①期 日 令和5年10月7日(土) 12:30~16:15
- ②演 題 陰陽師と暦
- ③会 場 歴博講堂
- ④講 師 小池 淳一・細井 浩志・林 淳・下村 育世(司会 赤澤春彦)
- ⑤参加者 225 人

(3) 第447回歴博講演会

- ①期 日 令和5年11月11日(土) 13:00~15:00
- ②演 題 陰陽道と伝承文化
- ③会 場 歴博講堂
- ④講 師 小池 淳一
- ⑤参加者 242 人

(4) ギャラリートーク

- ・令和5年10月14日(土) 小池 淳一
参加者 58人
- ・令和5年10月29日(日) 小池 淳一
参加者 82人
- ・令和5年11月4日(土) 小田 真裕
参加者 93人
- ・令和5年11月18日(土) 遠藤 珠紀
参加者 25人
- ・令和5年11月19日(日) 赤澤 春彦
参加者 54人
- ・令和5年11月25日(土) 梅田 千尋
参加者 60人
- ・令和5年12月2日(土) 小田 真裕
参加者 78人
- ・令和5年12月3日(日) 下村 育世
参加者 45人

5. 成果と課題

本企画展示は館蔵の「奈良暦師吉川家資料」を主たる対象とした共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」とそれを引き継いだ科学研究費基盤研究(C)「古代～近代陰陽道史料群の歴史の変遷と相互関係の解明」2021～2023年度、代表・梅田千尋京都女子大学教授)の研究成果および展示プロジェクト委員の多くがかかわった『新陰陽道叢書』(2020～2021年、名著出版)の成果をふまえ、それらを実際の資料に基づいた展示に構成して研究発信を行なったものであった。こうした基盤の上に館蔵資料をはじめ、各地の陰陽道・暦に関する資料を調査分析し、館内外の第一線の研究者の知見を動員して、陰陽道および暦研究の最前線を可視化することができた。このことは当館の設置理念の具現化として誇れることであり、研究と展示の効果的な連動の成果といえる。

展示のコンセプトとしては陰陽道の通史の提示を主眼とし、さらにそれと深く関連する暦の文化史的な様相についてもスペースを割り、説話世界や民俗次元での様相、近代化の過程において惹起した諸問題についても広く目配りをした。その際、文書や典籍以外にも出土資料や絵巻、模型、道具類を取り上げ、さらには映像やCG、タッチパネルを活用して展示の意図や資料の性格をわかりやすく示すように心がけた。特に「泣不動縁起絵巻」については、その実物とタッチパネルによる全体の鑑賞に加えて模型による立体的な情報発信を行なった。また安倍泰忠の日記

である「養和二年記」を現代語訳し、タッチパネルのなかにイラストとともに組み込んで、陰陽師の日常をうかがえるように工夫してみた。これらは多様な観覧者の関心にこたえるという点で大きな効果があったと考える。また文献資料に記載されている呪術の実践例を出土資料と照合できるように展示したり、共同研究の過程で吉川家資料のなかから見出された紙背文書を取り上げ、そうした資料のすがたとその意味を展示して研究の最前線を具体的に鑑賞できるようにした点も「研究」の発信として大きな意味があったといえよう。

本企画展示は館蔵の吉川家資料のみならず、関連する陰陽道関連資料を積極的に活用し、さらに京都府の曆彩館所蔵の若杉家文書や大將軍八神社所蔵の皆川家文書なども借用することで、陰陽道資料の多様性と重層性を明らかにした。加えて、共同研究および展示にむけての準備作業のなかで、洪川春海の後裔である海野家の資料や吉川家に隣接していた中尾家資料の所在確認や内容分析を進めることができた。このことは展示が調査研究の新展開の糸口となったという点で重要である。

以上のような陰陽道と暦をめぐる通史の提示という研究課題は、展示だけで完結させてよいものではなく、関連学会をはじめ、人文学全体に向けて持続的に発信、共有されるべきものである。そのために図録を外部出版とし、一般学術書としての販売を可能にした。さらに展示期間中に「書物・出版と社会変容研究会」や「陰陽道史研究会」等が展示見学を含む研究会を当館で開催し、研究者コミュニティのなかでも比較的短期間のうちに批評や批判を受け、それに基づいて研究の前進と深化を図ることができたことも付け加えておきたい。

情報発信の面では、複数の雑誌および新聞各紙に情報提供を行ない、特集記事の掲載につなげたのに加えてX（旧ツイッター）ではほぼ毎週、館蔵資料の紹介を行ない、Youtubeでも動画による広報を行なってみた。特にXは投稿された情報が次々と引用されていくので、効果が大きかったといえる。また展示室で「かんたん解説」をオリジナルキャラクターの「セイメイくん」の絵を添えるかたちで提示したが、XやYoutubeでも「セイメイくん」が登場するようにして、難解な展示内容にアクセスするための敷居をなるべく低くするように心がけた。「キャラクターがかわいい」という評判が企画展示開始前からポスター、チラシなどを介して広がり、宣伝効果がおおいにあったものと考えられる。

しかし、一方で問題点・反省を要する点も少なくない。最大の問題点は展示パネル、キャプションの数と文字数が多くなり過ぎたことで、資料保護のために、照明が暗い展示室での大量の文字情報の提示は不親切であった。パネル、キャプション等の解説は基本的に図録の入稿原稿をもとに縮約して作成したが、第I部、第III部では整理しきれず、結果的に乱暴なものとなってしまった。展示における文字情報については、展示プロジェクト委員全体での十分な検討、さらには校正に時間をかけるなど、丁寧な準備を行なうべきであった。

さらに、それに伴う問題として、観覧者が文字数の多いパネル、キャプションを間近に見ることができず、不満を感じさせた場合があった。また一部で観覧者の導線が映像資料の鑑賞の妨げとなっていた。これについては会期の後半に別室での映像資料の鑑賞が可能ないように処置したが、展示室での資料提示およびその手法については配置効果のシュミレーションと観覧者の側に立った周到的配慮が必要であった。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、千葉日報、日本経済新聞、朝日小学生新聞、朝日中高生新聞、読売KODOMO新聞等、記事数92（2024年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

時空旅人11月号、芸術新潮10～12月号、目の眼10～12月号、ぐるっと千葉10～12月号、博物館研究10～12月号、Discover Japan11月号、ムー11月号、歴史街道12月号等、64誌（2024年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」1番組（2024年3月末）

【その他】

Internet Museum, FASHION PRESS, 美術手帖, 美術展ナビ, アトリビング@Living, ニコニコ美術館 他ウェブ掲載多数 66件（2024年3月末）

企画展示「歴博色尽くし」

会期：令和6年3月12日（火）～令和6年5月6日（月・休）（開催日数：50日間）

1. 展示趣旨

本企画展示は、「色」をテーマとした館蔵資料展である。ここでは「色」という言葉を大きくとらえ、“いろ・つや・

かたち”，すなわち色彩や質感，微細な構造をテーマに館蔵資料を取り上げ，歴史学・考古学・民俗学・美術史・自然科学の観点から色と人間とのかかわりについて考えることとした。権威あるいはおそれを象徴する存在としての色，職人らによって生み出される技芸としての色，など，「色」というキーワードから館蔵資料のさまざまな見方を引き出すことを試みる。加えて，それぞれの資料がなぜ歴博にやってきたのか，「こんな資料が歴博にある！」という驚きと，博物館が本質的にもつ“雑然”や“混沌”といった魅力を伝えたいと考えた。人間の営みに深くかかわっている，考えれば考えるほど不思議な言葉である「色」について，本展示をきっかけに考え楽しんでいただくことが本企画展示の目指すところである。

なお本企画展示は，一般社団法人日本色彩学会の後援を受けた。

2. 展示構成と主な展示資料

・展示構成

- コーナー1 2棟の建築彩色模型 ～あなたがたはなぜ、歴博に？～
- コーナー2 身にまとう色 ～染織工芸の色と模様～
- コーナー3 ふたつの「赤絵」～色がなす文化、文化がなす色～
- コラム 明治初年の色彩教育
- コーナー4 漆工芸にみる色彩 ～蒔絵・螺鈿・色漆～
- コーナー5 古墳の彩り ～「もの」と「空間」～
- コーナー6 鉄の隕石で作られた刀剣 1～ウイドマンシュテッテン構造が生み出す隕鉄の質感～

・主な展示資料

醍醐寺五重塔彩色模型，平等院鳳凰堂斗栱彩色模型，寿印色見本，友禅色見本，法隆寺裂帖，疱瘡絵（だるま，風車，犬）歌川芳鶴画，東京名所新橋停車場 楊斎延一画，錦絵 色図，色漆発色試し板（多色），滝に虎密陀絵蒔絵印籠，朝顔花鳥螺鈿ゲーム箱，結び紐を朱彩で表現した石製合子（奈良県マエ塚古墳出土），装身具（千葉県駄ノ塚古墳出土），金銅装の刀子と巾着袋形容器（千葉県蕪木5号墳出土），三角紋と盾の表現（福岡県王塚古墳（復元模写）後室左側壁），三角と円形，双脚輪状の紋様表現（熊本県釜尾古墳（復元模写）），ギボン（ギベオン）隕鉄の切断片（ウイドマンシュテッテン構造），ギボン（ギベオン）隕鉄製の脇差「天降剣（あふりのつぎ）」（すべて本館蔵）

3. 刊行物

展示図録（A4判92頁）

展示解説シート（B4版二つ折り），展示資料一覧（B4版二つ折り）

広報用ポスター，チラシ

4. 関連行事

- ・報道向け内覧会 3月11日（月）
- ・ケーブルテレビ296番組「歴博のミカタ」出演（3月14日（木）取材，4月22～28日放映）鈴木卓治
- ・歴博友の会会員向け展示解説 3月18日（月）鈴木卓治
- ・第452回歴博講演会「「歴博の少し不思議な資料の話～「歴博色尽くし」展に寄せて～」4月13日（土）13時～15時 於国立歴史民俗博物館講堂 鈴木卓治
- ・歴博登録ボランティア向け展示解説 4月24日（水）鈴木卓治
- ・日本色彩学会会員向けライブ配信 4月26日（金）（Zoomによる展示場からのライブ配信）鈴木卓治，日高杏子（日本色彩学会；展示協力者），國本学史（同左）参加者約80名
- ・ギャラリートーク 全5回 会期中の土曜日13：00～14：00
 - 3月16日 コーナー3：関沢まゆみ，大久保 純一
 - 3月30日 コーナー1：坂本稔，濱島正士
 - 4月6日 コーナー2：澤田和人，コーナー4：日高薫
 - 4月20日 コーナー5：上野祥史
 - 4月27日 コーナー6：齋藤努
- ・関連イベント 色彩文化体験コーナー「いろどりみどり」 会期中全期間

①自分だけのオリジナル色見本を作ってみよう：日本の伝統色・配色の解説パネルを設置し，はがきサイズの白色用紙に，お気に入りの色のシールを選んで貼り，オリジナルの色見本を作る体験コーナー。たいけんれきはく

にて実施。

②おとなの塗り絵—^{うんげん}縹綯彩色を楽しむ：はがきサイズの白色用紙に、醍醐寺五重塔彩色模型から取材した縹綯模様の白描を印刷しておき、色鉛筆で自由に塗り絵を楽しんでもらう体験コーナー。たいけんれきはくにて実施。

③赤から想起するもの世界100か国調査：株式会社博報堂が刊行している広報誌『広告』（Vol.417 特集：文化）の連動企画「赤から想起するもの世界100か国調査」サイトを、株式会社博報堂の許可を受けて利用するもので、自分のスマホやPCからサイトにアクセスし、赤色に関して「自分の思いついたこと」を入力すると、「赤から想起するもの」に関する世界100か国12,000名の調査結果との比較結果が表示され、世界のどれだけの人が自分と同じことを連想するのかを可視化する企画。

監修：日高杏子（芝浦工業大学 色彩・コミュニケーションデザイン研究室）

協力：（一社）日本色彩学会、日本色研事業（株）、（一社）日本塗料工業会、荒井康雄（日本色研事業）、小林輝雄（日本塗料工業会）、名取和幸、光武智子、北島耀（日本色彩学会関東支部）

広報動画（約2分間）2月16日よりYouTubeで公開 約5100回視聴（2024年7月末）

展示記録映像（約21分間）6月7日よりYouTubeで公開 約1200回視聴（2024年7月末）

5. 成果と課題

本企画展は、当初2022年秋の開催を目指して、2019年12月に応募したものであるが、目まぐるしく変化する世の中の状況に翻弄された催事となった。2020年のCOVID-19の流行にともない、歴博も感染防止対策として緊急閉館するなど、展示計画の大幅な変更を余儀なくされた。また、2020年秋に開催を予定されていた伽耶展の開催が延期となり、2022年秋開催を目指す韓国側・国内巡回展先との再調整にあたって、本企画展を伽耶展が開催不可能となった場合のバックアップ展示として位置づけ準備する、など紆余曲折の経緯をたどり、ようやくこの2024年春の開催にたどりつくことができた。

歴博の企画展示は、共同研究をはじめとする大規模研究の成果公開の場として開催することが多く、奥行きのある豊かな内容をもつ“deepな”展示こそが、他館にはない歴博の特筆すべきアドバンテージである。一方本企画展は、いわばその“逆張り”ともいえるアンソロジーの構成、すなわちそれぞれ独立した内容をもつ（特集展示程度の）小規模の6つのコーナーが集まった“lightな”展示となっていく。博物館型研究統合のモデルにおける資料-研究-展示のサイクルに照らせば、研究から展示に進むパターンと、資料から展示に進むパターンの両方があってよく、普段の企画展示が前者のパターンとすれば、本企画展は後者のパターンとみなせる。

エントリー時の申請書では、「『色』をテーマとした館蔵資料展として企画した。館蔵資料（複製・レプリカを含む）の中で、着色された資料を展示し、それぞれに解説を加え、全体として日本における色と人とのかかわりが浮かび上がる展示構成を目指す。また、資料の色彩・色材に対する科学分析から何がわかるかについても、あわせて示す。」としていたが、着色の館蔵資料が思いのほか少ないことから、「いろ・つや・かたち」と範囲を拡大し、「特徴的な色・艶・表面形状をもつ館蔵資料展」とコンセプトを再設定した。各コーナーの担当の先生方には、なるべくそれぞれのコーナーで自由に発想の翼を広げてほしいこと、コーナー間の内容調整は積極的には行わなくてよいこと、そしてできれば、ふだん展示のチャンスにめぐまれにくい資料を選んで出展してほしいこと、をお伝えして展示を組み立てていった。

本企画展の準備は、他館の資料借用を行わないこと、企画展示室Aのみを使用すること、展示造作の費用を可能な限り切り詰めることなど、“予算規模厳守”の態度ですすめた。これは、コーナー1の建築模型展示に係る経費（建築模型の出庫・組立・解体・再収蔵等）をにらんでいたこともあるが、バックアップ展示として館の財政負担を極小にしたい、という考えもあった。展示内容の充実を個性と誇る歴博にとっては、お金の都合で考えを小さくする発想は極力回避すべきだろうが、持続可能性の維持もまた博物館の重要なミッションであり、前向きに挑んでいかねばならない課題である。

展示が開いてみると、思っていたよりはるかに多くの方々から本企画展について前向きな評価を多く賜り、入場者数もほぼ過去の企画展示に比して遜色のないものとなったことは、たいへんありがたいことであった。通常の歴博の企画展示とは異なる方向性の展示構成が、来館者の眼には新鮮に映ったと思われる。もちろん、展示資料が少ない、もうすこしボリュームが欲しい、いうご意見もいただいております、もう少しうまいやり方はあるだろうが、想定よりもよい結果を得られた企画展であったと自負する次第である。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、千葉日報、読売KODOMO新聞等、記事数25（2024年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

美術展びあ2024, 芸術新潮3・4月号, ぐるっと千葉3・4月号, 博物館研究3・4月号, 時空旅人3月号, 目の眼4月号, 日経サイエンス4月号, ムー 4月号等, 46誌 (2024年3月末)

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」(2024年4月22日~28日放映)

【その他】

Internet Museum, FASHION PRESS, 美術手帖, 美術展ナビ, マイナビニュース 他ウェブ掲載多数 38件 (2024年3月末)

【くらしの植物苑特別企画】

「季節の伝統植物」

春：伝統の桜草 2023年4月11日（火）～4月30日（日）（18日間）
 夏：伝統の朝顔 2023年8月9日（水）～9月10日（日）（30日間）
 秋：伝統の古典菊 2023年10月31日（火）～11月26日（日）（24日間）,
 肥後菊は12月3日（日）まで
 冬：冬の華・サザンカ 2023年11月28日（火）～2024年1月28日（日）（46日間）

1. 展示趣旨

江戸時代に隆盛をきわめた園芸文化は、日本独自の感性と高度な技術により、多種類の植物群にわたっておびただしい品種群を作り出してきた。それらの多くは明治時代以降の西洋園芸の急速な普及によって失われ、かつての園芸技術も消滅しようとしている。この特別企画は、絶滅に瀕している古典園芸植物の系統の探索と維持、生物学的な基礎研究と歴史的な基礎研究の融合を行い、その成果を展示として公開するものである。

2. 展示構成と主な展示品

特別企画「季節の伝統植物」では、四季に関わる4つの園芸植物を展示した。

春：「伝統の桜草」とは、江戸時代中期以降、園芸家によって野生種の中から変わった花が探し出され、多くの品種が生み出されてきた一連の桜草をさす。今年度は「サクラソウの八重咲とそれに関わる遺伝子」をテーマとした。パネル展示では、サクラソウのABCモデルに関わる遺伝子を対象として、がく、花弁、花筒、雄しべ、雌しべの各器官の発現傾向について一重咲と八重咲での違いを解説した。

夏：「伝統の朝顔」とは、江戸時代以降になると、文化・文政・天保期、嘉永・安政期、明治・大正期など、繰り返し朝顔ブームが訪れ、そのたびに葉と花の多様な変化や組み合わせを楽しむために作り出されてきた変化朝顔を意味する。今年度は、「ゲノムに記されたアサガオの歴史」をテーマとした。ゲノムの解読方法の概説、変異遺伝子の起源と日本園芸品種の由来、アジアとくに日本に入ってきてからトランスポゾン（動く遺伝子）が活性化した様子についてパネルで紹介した。

秋：「伝統の古典菊」とは、筆先のような花弁をもつ「嵯峨菊」や花弁の垂れ下がった「伊勢菊」、花弁のまばらな「肥後菊」、花弁が咲き始めてから変化していく「江戸菊」のことである。これらに花の中心が盛り上がり咲く丁子菊を加えた伝統的な中輪種は「古典菊」と呼ばれている。今年度は、「浮世絵に見る菊」をテーマに、歌舞伎の菊花壇と死絵、女性の菊作り、名所や縁日での菊、菊細工といった、江戸時代の浮世絵に描かれた菊の栽培や観賞などの様子についてパネルで紹介した。

冬：サザンカは、自生種に近い「サザンカ群」、獅子頭の実生またはその後代と考えられている「シシガシラ（カンツバキ）群」、サザンカとツバキの間で自然にできた雑種またはその後代と考えられている「ハルサザンカ群」の3グループに大別されるが、花はグループごとに10月中頃から翌年2月にかけて上記の順に咲いていく。今年度は「サザンカを用いたツバキ属の種間雑種」をテーマとした。パネル展示では、サザンカ園芸品種と他種との関わり、サザンカとトウツバキの雑種、サザンカを用いた日本生まれの種間雑種、海外における近年のサザンカ種間雑種について紹介した。

3. 主な行事

特別企画「季節の伝統植物」に関連した観察会

2023年4月22日（土）：第289回「サクラソウの八重咲とそれに関わる遺伝子」

水田 大輝

8月26日(土)：第293回「ゲノムに記されたアサガオの歴史」	仁田坂 英二
11月25日(土)：第296回「浮世絵に見る菊」	平野 恵
12月16日(土)：第297回「サザンカを用いたツバキ属の種間雑種」	箱田 直紀

苗の有償頒布〔桜草：4月11日(火)～4月30日(日)、朝顔：6月24日(土)・25日(日)、菊：7月22日(土)・23日(日)、サザンカ：11月25日(土)〕

4. 成果と課題

「伝統の桜草」では、現代になって作出が盛んになった八重咲品種について遺伝子の側面から解析し、最新の研究動向について紹介することができた。

「伝統の朝顔」では、全ゲノム配列の比較によって日本のアサガオ系統の由来についてたどり、歴史資料のみでは知り得なかったアサガオの歴史が明らかにできる可能性を示した。なお、観察会については、昨今の猛暑の対策として、講堂で開催した。

「伝統の古典菊」では、浮世絵に描かれた菊の栽培や観賞などの様子について見ていき、栽培や運搬の方法、品種などについて現代との異同を伝えることができた。

「冬の華・サザンカ」では、白花一重の原種から多彩な園芸品種が生み出されていったことを、種間雑種という観点からとりあげた。また、それが海外でのサザンカ人気につながっていくことを紹介した。

5. マスコミでの取り上げ

【新聞】

東京新聞、産経新聞、花卉園芸新聞、全私学新聞等、記事数10(2024年3月末)

【雑誌・ミニコミ誌】

NHK趣味の園芸8月号、趣味の山野草8月号、園芸ガイド2024冬号、ぐるっと千葉8・9・10・11・12・1・2・4月号等、47誌(2024年3月末)

【テレビ・ラジオ】

newsちば等、2番組(2024年3月末)

【その他】

みんなの趣味の園芸、じゃらんnet 他ウェブ掲載多数 41件(2024年3月末)

6. 展示プロジェクト(◎：代表、○副代表)

(館外)

辻 誠一郎	東京大学名誉教授
仁田坂英二	九州大学大学院理学研究院・准教授
箱田 直紀	恵泉女学園大学名誉教授
平野 恵	台東区立中央図書館・専門員
岩淵 令治	学習院女子大学・教授
水田 大輝	日本大学生物資源科学部・専任講師

(館内)

◎青木 隆浩	本館研究部・准教授
日高 薫	本館研究部・教授
○澤田 和人	本館研究部・准教授
川村 清志	本館研究部・准教授
山村 聡	本館管理部・専門職員

【特集展示】

第1展示室「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」
2023年11月14日(火)～2024年2月12日(月・休)

1. 展示趣旨

日本史で古代（飛鳥・奈良・平安時代）と呼ばれた時代、北海道ではオホーツク文化と擦文文化が展開していた。オホーツク文化は、5世紀から9世紀頃にサハリン南部から北海道の東北部、千島列島にかけて広がった文化である。北方から南下した大陸系の文化と考えられており、海獣狩猟と漁撈を生活の基盤とし、クマを中心とする動物儀礼に特徴がある。擦文文化は7世紀後半から12世紀にかけて北海道の全域に広がった文化で、本州の古代国家の強い影響のもとに成立した。漁撈・狩猟・採集を中心に補助的に雑穀を利用し、アイヌの文化の直接的な母胎になったと考えられている。ともに本州の古代と同じ時代であるにもかかわらず、本州においては馴染みが薄い。本特集展示は、この二つの文化の特徴を平易に解説することを目的とする。

2. おもな展示資料

北見市内各遺跡（トコロチャシ跡, トコロチャシ南尾根, トコロ貝塚, 栄浦第二, 岐阜第二, 大島2）出土資料（東京大学常呂実習施設所蔵）、北見市常呂川河口遺跡出土資料（北見市ところ遺跡の森所蔵）、根室市弁天島遺跡出土資料（根室市歴史と自然の資料館所蔵）など約30点

3. 関連行事

- ・ 展示解説会 2023年11月14日 講師：熊木俊朗（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）・林部 均（本館研究部考古研究系・教授）
- ・ 歴博講演会 2023年12月9日 「オホーツク文化とは何か―東京大学文学部と北海文化研究―」 講師：熊木俊朗（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

4. 刊行物

- ・ 展示解説シート（A4判4頁）、広報用ポスター・チラシ
- ・ 展示解説冊子（A5判24頁）

5. 成果と問題点

展示スペースが狭かったが、その分、コンパクトに展示趣旨に沿った展示ができた。歴博への来館者の中心である千葉県をはじめとした本州の方々にとっては、はじめてのものであり、北海道の古代を知ってもらうという意味では大きな成果があった。また、日本列島の文化のもつ多様性も具体的な資料で示すことができた。本展示は東京大学との連携展示であり、大学の調査、歴博の共同研究の成果について博物館展示を使って社会に還元するという点においても大きく貢献した。なお、本展示は会期中に展示解説映像を制作し、歴博YouTubeにおいても、広く公開をした。本州ではあまり知られていない北海道の歴史を展示として紹介する取り組みは、小さなものでもいから続けていく必要性を実感した展示となった。

さらに、本特集展示をきっかけとして資料の活用について東京大学常呂実習施設と連携することが可能となり、展示資料の一部の借用、ならびに複製製作をおこなった。これらの資料を使って、総合展示（常設の展示）に北海道の古代、オホーツク文化・擦文文化の展示コーナーを次年度以降に設置することになった。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、毎日新聞、東京新聞等、記事数11（2024年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉11～2月号、博物館研究12～2月号、世田谷文化等、24誌（2024年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」1番組（2024年3月末）

【その他】

ARTAgenda, Fieldnet 他ウェブ掲載10件（2024年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎林部 均（考古研究系・教授）

村木 二郎（同・准教授）

熊木 俊朗（東京大学大学院人文社会研究科・教授）

太田 圭（同・助教）

第3展示室「江戸の妖怪絵巻」 2023年8月1日（火）～9月3日（日）

1. 展示趣旨

江戸時代には絵本や草双紙、絵巻、錦絵などありとあらゆる種類の妖怪図が無数に制作され、妖怪ブームの時代だったといわれて久しいが、その理由のひとつは、妖怪というものが描き手の想像力を刺激するものだったからだろう。当館は「怪談・妖怪コレクション」と題して、国内でも有数の幽霊や妖怪の絵画コレクションを有している。今回の特集展示はその中から絵巻という形式に焦点を当てて展示資料を選抜する。室町時代に成立し、江戸時代に多数の模写作やアレンジ作を生んだ「百鬼夜行絵巻」の中で、当館所蔵の狩野益信作は江戸初期の優品である。

「百鬼夜行図」のように妖怪たちのパレードを描く「百鬼夜行絵巻」の他に、江戸時代には妖怪図鑑ともいえるべく、多種類の妖怪を羅列的に並べた絵巻も生み出された。「化物絵巻」はそうした作例のひとつである。

上記のほかに、源頼光と四天王らによる土蜘蛛退治を描く「土蜘蛛草子」のように中世の御伽草子の流れを汲むものや、鹿児島を舞台に妖狐を退治する侍大石兵六を主人公にした物語「大石兵六物語絵巻」など、絵巻本来のストーリー性を持つ構成をとるものも展示する。

また、純粹の妖怪だけではなく、地獄をテーマにした耳鳥齋の戯画「地獄図巻」も加えることで、絵巻という形式の中で多彩な展開を見せた江戸期の妖怪図を紹介する。

2. おもな展示資料

狩野益信 「百鬼夜行図」 F-320-705
「化物絵巻」 F-320-6
「大石兵六物語絵巻」 F-320-5
「土蜘蛛草子」 F-320-2
耳鳥齋「地獄絵巻」 F-320-723 など

3. 関連行事

・展示解説会 2024年8月1日
・歴博講演会 2024年8月12日

4. 刊行物

展示解説シート（A4判4頁）、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

「怪談・妖怪コレクション」は対外的に当館を代表するコレクションとして知られ、夏季を中心に館外への貸し出しが多いにもかかわらず、館内的には2001年の企画展「異界万華鏡」や2009年の機構連携展示「百鬼夜行の世界」以来、長くまとまった展示機会を設けてこなかった。今回の特集展示は過去の展示でも館内利用のなかった資料を公開することができ、近年の妖怪ブームも与って、期間中の来館者数の増加にも貢献することができた。ただ、絵巻という長大な画面を有する資料群に対し、展示室の面積は十分ではなく、資料の一部分しか公開できなかったことは残念である。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、毎日新聞、東京新聞等、記事数18（2024年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉8・9月号、芸術新潮9月号等、23誌（2024年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」、bayFM「ハロー千葉」等 3番組（2024年3月末）

【その他】

FASHION PRESS, JIJL.COM, ARTAgenda 他ウェブ掲載多数 39件（2024年3月末）

7. 展示プロジェクト (◎：代表)

◎大久保純一 (情報資料研究系 教授)

第3展示室「新出の野村コレクション」

2024年1月5日 (金)～2月4日 (日)

1. 展示趣旨

(1) 新収蔵のコレクションの公開

野村コレクションとは、京都の美術商であり小袖を中心とする近世日本の衣裳の蒐集家でもあった野村正治郎 (1880-1943) が築きあげた服飾品・装身具の一大コレクションである。美術史上、多大な価値がある一群として夙に知られてきた。その大部分は本館に収蔵されているが、いくつかは国内外の各地に分蔵されており、また、散逸し行方知らずとなったものもある。

今回展示する小袖裂を貼装した3点の2曲1隻屏風は、野村コレクションのうちに含まれ、近年新たに発見された資料である。令和3年度に寄贈を受け、一般に公開するのは初めての機会となる。いずれにも裏面に野村賤男の印章があり、賤男が制作に関与したとわかる。賤男は旧姓を森下といい、日系二世のアメリカ移民であったが、1930年に正治郎の一人娘の政子と結婚し、野村家に婿入りした。

本特集展示では、新出の3点の小袖裂貼装屏風を紹介するとともに、賤男の足跡をたどり、第二次世界大戦を挟む時期の日系アメリカ移民の活動についても考えていく。

2. おもな展示資料

小袖裂貼装屏風 (6点貼装) H-35-1204 本館蔵

小袖裂貼装屏風 (8点貼装) H-35-1205 本館蔵

小袖裂貼装屏風 (7点貼装) H-35-1206 本館蔵

写真：オーキッドツリーを植樹する野村賤男とマイアミ市長 個人蔵 など約20点

3. 関連行事

展示解説会 2024年1月10日

4. 刊行物

展示解説シート (A4判4頁), 広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

本特集展示の主軸になったのは新収資料であるが、それらは本館を代表する所蔵資料である野村コレクションに連なるものである。資料の公開が新たな資料の収蔵に繋がることを示し、本館の研究理念である「博物館型研究統合」の実践例になったと考える。

資料の移動や文化行政との関わりなど、受容史の側面から取り上げた点に新機軸があり、戦前戦後の国内外の日本の染織品に対する評価、染織品を介した人脈、博物館が果たした役割について、一般には知られていない事象を紹介できたものと思われる。

その一方で、染織ないし服飾の歴史という視点からではなかったため、そうした面での解説がやや不足していた点は否めない。また、資料の保護のため約一か月間の展示としたが、会期が短かすぎるとの声が寄せられた。照度を低くするなど工夫して、二か月程度の会期を確保すべきであった。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞, 毎日新聞, 東京新聞等, 記事数11 (2024年3月末)

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉1・2月号, 博物館研究2月号, 芸術新潮2月号等, 11誌 (2024年3月末)

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」1番組 (2024年3月末)

【その他】

婦人画報 他ウェブ掲載9件（2024年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎澤田 和人（情報資料研究系 准教授）

第4展示室「四国遍路・文化遺産へのみちゆき」

2023年9月26日（火）～2024年2月25日（日）

1. 展示趣旨

四国遍路は、四国4県を周回するルートの中に八十八ヶ所の霊場が設置された回遊型の巡礼路のことである。その起源は真言宗の宗祖、弘法大師空海に指定され、1200年に渡り人々に信仰され、継承されてきた。そこでは「お接待」に代表される地域社会のホスピタリティーと、宗派や時には宗教や国籍さえ超えて共有される精神性と普遍性が注目されている。もっとも四国遍路の長い歴史のなかでは、その位置づけや人々の関わり方も大きく変化している。とりわけ現代では、世界的に知られるようになった四国遍路を、世界文化遺産に登録しようとする運動が活発化している。本展示では、四国遍路の歴史的文化的背景を概観しつつ、近現代における文化資源化の内実に迫っていく。

2. おもな展示資料

卷子 : 「高野大師行状図画」巻一 誕生奇特

典籍 : 『三教指帰』／『三教指帰簡註』／『遍照發揮性霊集』

摺物・絵図 : 弘法大師と衛門三郎の摺物 杖杉庵／高野山惣絵図／四国徧礼絵図 卯之町新地虎屋武三郎版／東多田村絵図

写真パネル : 仏絵師西丈 中国四国名所旧跡図／太龍寺岩谷図 中国四国名所旧跡図／甲浦番所 中国四国名所旧跡図／往来手形／宇和島藩領通行手形

文書資料 : 四国霊場順拝日記／四国西国順拝記／阿讃伊土日記

有形資料 : 遍路衣装、山谷袋、納経帳、馬木遍路道道標 複製

3. 関連行事

ギャラリートーク6回

（2023年10月7日、10月28日、11月23日、2024年1月13日、1月21日、2月10日）

4. 刊行物

展示解説シート（A4判4頁）、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

本展示は、広領域連携型基幹研究「フィールドサイエンスの再統合と地域文化の創発」のテーマに沿う形で実現した。研究会の共同研究員が所属する愛媛県歴史文化博物館、愛媛大学の共催を得ることで、それぞれの施設の所蔵資料の借用、展示が可能となった。四国遍路については、本館4室の常設展示で土産物を中心とした展示が行われているが、その歴史の変遷や文化的背景について十分な紹介はできていなかった。本展示では、古代にさかのぼる四国遍路に関する言説や、江戸時代以降、庶民を巻き込み地域的な広がりもみせた文化的な特質を主題化することができた。21世紀以後の世界遺産登録運動の過程で生じた、文化資源としての価値づけや研究内容の深化についても紹介した。上記の諸資料に加えて本展示では、実際に四国遍路の当事者からの借用資料を展示することで、現代の歩き遍路の実情についても概観できるように配慮した。また当館の常設展示資料であった遍路道の道標である「馬木遍路道道標 複製」を用いることで、館蔵資料の活用にも貢献したと考える。

展示期間中には、計6回のギャラリートークを行うことで、一般の来館者に直接展示の内容を紹介することができ、解説後の質疑応答の機会を持つこともできた。対面的なコミュニケーションによって、展示内容についての理解が深まったと考えられる。また、関連するイベントとして四国遍路についてのシンポジウムを1月に開催した。当日は共同研究員である愛媛県歴史文化博物館学芸員の大本敬久氏、愛媛大学四国遍路・世界巡礼センター所長の胡光氏を中心として、四国遍路の資源化をめぐる現状についてのより踏み込んだ議論が行われた。

課題としては、資料の性質や展示空間の制約から、展示資料が時系列的な流れや、地域的な広がりを十分に考慮

したものにはならず、ややわかりにくい点があったことが挙げられる。また、文化資源としての現代的な変化を示す展示資料が、全体的には限られたものとなり、研究会が目指す世界遺産運動を含めた今日的な課題については、やや印象の薄いものとなったことも反省すべき点であった。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、東京新聞等、記事数18（2024年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉9～2月号、博物館研究11～2月号、東京人2月号等、29誌（2024年3月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」1番組（2024年3月末）

【その他】

Tokyo Live & Exhibits 他ウェブ掲載10件（2024年3月末）

7. 展示プロジェクト（◎：代表）

◎川村 清志 本館研究部民俗研究系 准教授
 高科 真紀 本館研究部 特任助教
 大本 敬久 愛媛県歴史文化博物館 学芸課長
 胡 光 愛媛大学法文学部教授

【展示プロジェクト委員会】

企画展示「陰陽師とは何者か—うらない、まじない、こよみをつくる—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

現在の日本列島上の社会の基盤を成している暦日感覚は、明治の改暦で太陽暦が採用されたことが大きな画期となったことはよく知られている。2023年は明治改暦（1873年）から、ちょうど150年の節目の年に当たる。このことをふまえて共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（代表・梅田千尋〔京都女子大学〕、2018～2020年度）による資料調査および研究の成果を中心とする展示を行う。

前近代の暦は陰陽師が関与して作成されたが、そのことは忘れられかけている。天文観測に基づき、暦を作成し、それに伴う占いやまじないに携わった陰陽師の活動に光をあて、陰陽道の歴史と民俗を総合的に描くことをめざしたい。

ここでは共同研究の成果でもある『新陰陽道叢書』の刊行（2020～2021年）をはじめとする陰陽道研究の進展に依拠しながら、陰陽道の基礎的な資料を集成し、日本列島社会における暦とその作成・管理をはじめとする暦日・天文等に関する陰陽道の姿を具体的に提示する。その際には陰陽師という存在とその職掌に着目し、前近代の暦に深く関わった陰陽道の形成から展開、衰退に関する史資料をなるべく広範に展示することで、俗的なイメージが先行しがちな陰陽道の実体とその歴史的民俗的な役割を提示し、新たな研究の礎石としたい。確実な資料に基づいて、陰陽道・陰陽師について考える機会を提供することが目的である。さらに暦関係資料を多角的な視点からとらえ、暦をめぐる文化を考察するとともに、時間をめぐる意識や観念の形成、天変や観天望気をめぐる習俗までをもとらえる糸口としたい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

展示構成、展示資料（館蔵および借用予定資料）の確認と調整をメール審議および会議（対面）によって進めた。
 第◆回 令和5年10月2日（月）

- ・展示資料の確認、キャプションおよびパネルの位置および内容の最終確認、今後の関連イベントのスケジュールの確認を行なった。
- ・図録、招待券の配布先の確認を行なった。
- ・関連する展示として、福井県立若狭歴史博物館等への資料貸出やコンテンツ提供等の打ち合わせを行なった。

3. 展示プロジェクト委員（◎代表、○は副代表）

(館外)

- 赤澤 春彦 摂南大学国際学部・教授
 梅田 千尋 京都女子大学文学部・教授
 林 淳 愛知学院大学文学部・教授
 細井 浩志 活水女子大学国際文化学部・教授
 遠藤 珠紀 東京大学史料編纂所・准教授
 小田 真裕 船橋市郷土資料館・主任主事(学芸員)
 近藤 絢音 神奈川県立公文書館・会計年度任用職員
 下村 育世 日本学術振興会・特別研究員
 松山由布子 中京大学教養教育研究院・講師
 小田島梨乃 リクルート/東京大学大学院博士課程
 垣東 敏博 暦会館/若狭路文化研究所・学芸員
 川波 久志 福井県立若狭歴史博物館・主任学芸員
 水谷 友紀 京都府立大学・共同研究員
 山本 琢 京都府立京都学・歴史館・副主査(学芸員)

(館内)

- 田中 大喜 本館研究部・准教授
 鈴木 卓治 本館研究部・教授
 後藤 真 本館研究部・准教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 ○松田 睦彦 本館研究部・准教授
 ◎小池 淳一 本館研究部・教授

企画展示「歴博色尽くし」

1. 展示プロジェクトの趣旨

「色」をテーマとした館蔵資料展として企画した。ここでは「色」という言葉を大きくとらえ、素材のもつ質感や微細な構造までを含めるものとする。特徴的な色彩や質感をもつ館蔵資料を取り上げ、歴史学・考古学・民俗学・美術史・自然科学の観点から展示・解説を行い、日本における色と人間とのかかわりについて考えた。「色」というキーワードから、館蔵資料のさまざまな見方を引き出すことを目指した。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2023年度は、全体のプロジェクト会議を開催せず、6つのコーナー(建築模型、色見本、漆工芸、錦絵、考古資料、隕石剣)それぞれ個別に展示内容や出展資料をコーナー担当者と煮詰めていった。

展示準備を円滑に進めるために、以下の原則を立てて実施した。これにより、展示係や関係業者とのやりとりが円滑になり、計画的にかつ見通しよく展示準備をすすめることができた。

- 業者とのやり取りは展示係を通して行い、教員が直接やりとりすることは極力避ける。(情報の流れを整理し、情報共有のミスを防ぎ、業者を混乱させない。)
- 展示代表(鈴木)と副代表(坂本)が緊密に連絡をとりあい、代表が決めるべき事項について、代表不在の時でも副代表の判断で意思決定し指示を出せるようにする。(意思決定を円滑にし、作業待ちのロスタイムを防ぐ。)
- 出展資料の整理と図録の編集について担当者を定め(島津が担当)、関連情報がかならず担当者が集まるようにし、かつ、代表副代表が不在でも、担当者の判断で作業がすすめられる権限を担ってもらった。(情報の錯綜ならびに作業ロスを防ぐ。)

2023年6月23日の展示内容説明会の時点では、各コーナーのタイトルおよび担当者は以下の通りであった。

1. 2体の大型彩色建築模型(坂本、濱島)
2. 色見本の世界(鈴木、澤田、島津)
3. 漆工芸にみる色彩表現(日高)
4. ふたつの「赤絵」(関沢、大久保)
5. 日本古代の色(上野、高田)
6. 鉄の隕石で作られた刀剣(齋藤)

ここから展示設計に入り、資料の配置を考えていく段階で、漆工芸と赤絵のコーナーは順序が入れ替わることとなった。また、色見本のコーナーは展示資料が多様で、単に色見本として紹介するのは難しい資料を含むため、染織品の色を扱うコーナーとして再構成することとし、澤田がこれを担当した。色漆発色試し版など、色見本として紹介しなかった漆資料は、日高担当の漆工芸のコーナーに組み入れてもらうことで無事展示できることとなった。

建築模型のコーナーでは、建築彩色に詳しい窪寺茂氏（建築装飾技術史研究所所長、元奈良文化財研究所建造物研究室長）の協力を仰いだ。窪寺氏にはコラム「古代における建築彩色いろいろ考」を図録に寄稿いただいた。

コラム展示として「明治初年の色彩教育」を設け、明治6（1873）年に小学校に導入された「色図」による色彩教育とその顛末を紹介することとし、島津がこれを担当した。色図に関して、色彩文化史に詳しい國本学史氏（慶應義塾大学非常勤講師）ならびに日高杏子氏（芝浦工業大学准教授、日本色彩学会理事）に協力を仰ぎ、國本氏には図録に論考「日本近代の色彩教育としての色図」を寄稿いただいた。また、日高氏の紹介を得て、一般社団法人日本色彩学会の後援を得ることができ、また「たいけんれきはく」を中心に展開する色彩文化体験コーナー「いろいろみどり」の監修をお願いすることができた。企画展示を機会に学術交流の輪が広がる体験を得たことはこの企画展示の大きな収穫のひとつと考えている。

最終的な展示構成と担当は以下の通りとなった。

- 1 2棟の建築彩色模型 ～あなたがたはなぜ、歴博に？～（坂本、濱島；窪寺）
- 2 身にまとう色 ～染織工芸の色と模様～（澤田）
- 3 ふたつの「赤絵」～色がなす文化、文化がなす色～（関沢、大久保）

コラム 明治初年の色彩教育（島津；國本）

- 4 漆工芸にみる色彩 ～蒔絵・螺鈿・色漆～（日高）
- 5 古墳の彩り ～「もの」と「空間」～（上野）
- 6 鉄の隕石で作られた刀剣 ～ウィドマンシュテッテン構造が生み出す隕鉄の質感～（齋藤）

印刷物として、ポスター、チラシ、展示図録のほか、展示室入口で配布する解説シートおよび展示資料一覧を作成した。

事前広報用のYouTube動画（約2分間）を制作し、2月16日より公開した。

展示記録映像（約21分間）を制作し、6月7日よりYouTubeで公開した。

関連イベントとして、歴博講演会、ギャラリートークのほか、後援団体である日本色彩学会の会員向けにZoomによるリモート展示解説会を実施した。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

（館外）

濱島 正士 国立歴史民俗博物館・名誉教授

（館内）

- ◎鈴木 卓治 本館研究部・教授
- 坂本 稔 本館研究部・教授
- 上野 祥史 本館研究部・准教授
- 大久保純一 本館研究部・教授
- 齋藤 努 本館研究部・教授
- 澤田 和人 本館研究部・准教授
- 島津 美子 本館研究部・准教授
- 関沢まゆみ 本館研究部・教授
- 高田 貫太 本館研究部・教授
- 日高 薫 本館研究部・教授

企画展示「歴史の未来—過去を伝えるひと・もの・データ—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

過去を見つめなおす際、人びとは残された多様なモノや記憶を手がかりとする。「歴史資料」とも呼ばれるそれらは、必ずしも固定的な価値観から見出されてきたわけではなく、過去を追い求める眼差しのもと、様々な主体によって「発見」されてきた。近年、自然災害や急速な社会の変容に影響され、過去に対する意識は大きく変化してきている。特に、情報技術の進展にともない、誰もが日常の断面を記録し継承することが容易になりつつある。そ

して、長い経過のなかで蓄積されてきた歴史資料に加え、災害や新型コロナウイルスの蔓延といった現在の経験の記録化により、歴史資料は日々増大しており、それらを通して描かれる歴史像や社会認識は実に多様である。

本展示では、これらの歴史資料像の変化に着目し、歴史資料の多様性を見つめ直し、歴史を描く行為の未来像を考えることを主たる目的にする。人間文化研究機構機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成」（代表・西谷大→後藤真：2016年～2021年）の成果をもとに、歴史資料理解の変遷と情報技術の応用事例について展示する。歴史を紡ぐための、最も基本である資料の広がり、深みについて理解を深め、来館者ととも未来を考えることを目指したい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

実際の資料の演示に備え、資料リストの確定～図録の作成準備等を、メールを中心に進めた。館内での検討に基づき、展示全体のテーマを確定させるとともに、全体の展示プランや、デザイン・広報などの方法について検討を重ねた。また、資料借用にとまない、館内外の展示プロジェクト委員から、借用先との折衝を進めてもらうとともに、資料情報の詳細な確認を実施した。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

（館外）

相川 陽一 長野大学・准教授
 岡田 義弘 九州大学・教授
 佐藤 琴 山形大学・准教授
 曾我麻佐子 龍谷大学・准教授
 高橋 修 茨城大学・教授
 南 勇輔 与論町教育委員会・学芸員
 宮間 純一 中央大学・教授
 安岡 健一 大阪大学・准教授
 山内 利秋 九州保健福祉大学・准教授
 吉川 圭太 神戸大学大学院・講師

（館内）

○天野 真志 本館研究部・准教授
 小倉 慈司 本館研究部・教授
 川邊 咲子 本館研究部・特任助教
 工藤 航平 本館研究部・准教授
 ◎後藤 真 本館研究部・准教授
 澤田 和人 本館研究部・准教授
 橋本 雄太 本館研究部・准教授
 三上 喜孝 本館研究部・教授

企画展示「時代を映す錦絵—浮世絵師が描いた幕末・明治—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

江戸時代後期に成立した多色摺浮世絵版画である錦絵は、役者絵や美人画、名所絵、花鳥画などで高度な表現を成し遂げ、江戸時代を代表する美術の一領域として世界的にも認知されている。錦絵は江戸市中に無数に存在する絵草子屋を通して不特定多数の人々に販売されたが、その流通形態も与って、世の中の出来事や流行を伝えるメディアとしての性格もまた有していた。このメディアとしての性格は江戸時代も終わりに近づくに従い急速に強まっていく。とくに天保の改革を機に風刺画のジャンルが成立してからは、世相を題材とした錦絵の中には、役者絵や美人画といった既成のジャンルをしのぐほどの売り上げを見せるヒット作も見出せるようになる。

本展は、主に「錦絵コレクション」（H-22）、「幕末維新風刺絵」（H-26）、「明治期版画一括」（H-845）、「怪談・妖怪コレクション」（F-320）などの豊富な館蔵資料を活用する。江戸時代末期から明治前期にかけて、戊辰戦争など世を揺るがす政治的出来事、大地震などの災害や疫病など人々を苦しめた災禍、多くの人々を集めた寺社の開帳や見世物、あるいは人々を熱狂させた流行現象など、激動する時代の中で生み出され錦絵の歴史資料的側面に光を当てて展示を構成したい。江戸時代の出版統制令は、幕府や大名に関する話題や同時代の政治的出来事を描い

て出版することを禁じていたため、その規制をかいくぐるための表現も多様に発展する。たんに世相を題材とした錦絵を時代順や画題ごとに展示するだけでなく、既存の画題をうまく隠れ蓑としながら、どのように人々に情報を伝えたかについても提示する。

展示プロジェクト委員会は館内メンバーのみで構成されているが、歴史、民俗、美術史それぞれの専門性を生かし、多角的な視点から資料へのアプローチをはかりたい。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

委員会は館内メンバーで構成されているので、随時対面あるいはメール連絡等で展覧会名、展示資料情報などのやりとりをおこなった。来年度は開催一年前ということで、企画展名、展示趣旨、展示構成など、開催要項に関わる内容を固めるとともに、メンバーからの情報提供により展示資料リストの追加修正をおこなった。また、展示候補となるべき資料購入（H-22に追加）も若干おこなうことができた。

展示構成案は、

- 序章 江戸の出版法令と錦絵
- 1章 風刺画の成立とヒット作
- 2章 災禍と錦絵
- 3章 錦絵に見る激動の幕末
- 4章 「開化」の表象
- 5章 熱狂する民衆

なお、本年度の最後に新年度着任予定の鷺頭桂氏の展示プロジェクト委員会への追加の了承を得た。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

- 天野 真志 本館研究部・准教授
- ◎大久保純一 本館研究部・教授
- 工藤 航平 本館研究部・准教授
- 川村 清志 本館研究部・准教授
- 山田 慎也 本館研究部・教授
- 鷺頭 桂 本館研究部・准教授

企画展示「人をつなぐジャポニスム—野村正治郎着物コレクションの軌跡(仮題)」

1. 展示プロジェクトの趣旨

本館の代表的なコレクションの一つである「野村正治郎衣裳コレクション」(H-35)を中核に据え、受容史的観点から捉えた展示。

野村正治郎(1880-1943)は着物をはじめ日本の染織品を主として扱う京都の美術商であり、活躍した時期には、ちょうど欧米でジャポニスムが最盛期を迎えている。そうした中で、外国人を相手にした正治郎および一族の販売戦略は、欧米圏に広がる人脈をつくり出していた。一方、国内では、産業振興や風俗研究等のために、正治郎は自身のコレクションを貸与するなどして協力し、やはり人脈を築いていた。そうした人々とのつながりを、活動が知られる記録類やコレクションの資料を通じて示すことにより、当時の社会の中で正治郎と彼のコレクションがどのような役割を果たし、いかなる意義をもっていたのか緋いていく。

また、正治郎の死後、コレクションは一時期アメリカに流出したが、継承した婿養子が日系アメリカ人であったことが大きく関係している。ジャポニスムから反日・戦争へ、そして戦後の日本ブームの再燃へという時代推移の中で、コレクションの移動の経緯とともに、日系アメリカ人が直面した特有の事情についても併せて見ていく。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

第1回 2023年11月5日

タイトルについて議論し、また前半の展示構成について検討を行った。

第2回 2024年1月5日

関連する展示として特集展示「新出の野村コレクション」を見学した。会議では後半の展示構成について検討を行った。

3. 展示プロジェクト委員 (◎：代表, ○：副代表)

(館外)

小山弓弦葉 東京国立博物館・工芸室長
田中 淑江 共立女子大学・教授
リンネ マリサ 京都国立博物館・主任専門職

(館内)

○日高 薫 本館研究部・教授
◎澤田 和人 本館研究部・准教授